

開 幕 式 挨拶

二松學舎大学長 今西 幹一

今からおよそ1400年前、3世紀に互って、日本から多くの官僚や学僧・学生らが、幾代にも互って 隋、唐に渡りました。それらは、主に北、南、南島の3つのルートを経ていました。帰路には渤海を経る今を経るルートがありましたが、私たちは概ねその南のルートをなぞるようにしてここ浙江省は浙江工商大学にやって参りました。昔日の遣使たちは、潮流と風向きに運命を任せて漂着に近い形で中国東南海岸に辿り着き、更に長安、あるいは洛陽へと向かったものでした。時には幾度も挑みながら渡航を果たせなかった者、渡航をしたものの帰国がかなわなかった者も生まれ、生命を落とす者も多々ありました。時間を要し、難航を余儀なくされたそのルートを、安全にして速達的手段でたった2時間2、30分足らずで、現代の「天女の磐船ハヅレ」でやって参りました。

14世紀前、命を賭してまで多くの人が大陸へ渡ったのは、中国先進文明への憧れ、というよりも文明の摂取受容の必要性によるものでした。すでに朝鮮半島等を経由して中国文明の流入は果たされていましたが、より積極的、組織的、経営・戦略的に中国文明・文化に学ぼうとしたゆえであると思います。制度、文物、人（高僧智識）等の移動に合わせて、文字文化（文字と文献）の移転伝播が大きな意味をもっていました。現在はそれぞれの事情に応じて変質を遂げていますが、日・中・韓を中心に漢字文化圏が形成されてもいました。他国語を全面的に自国語に置き換えることなく、書物そのものが「共通言語」の役割を果たしたのでした。

二松學舎大学と浙江工商大学（日本文化研究所）とが共同して開催いたします‘06国際学術シンポジウム“ブックロードと文化交流 - 日本漢文学の源流 - ”は、如上の歴史的経緯を踏まえ、書物の果たした役割を見据えようとするにあります。二松學舎大学は、1877年、漢学塾二松學舎として発足、“国漢”（国風と漢風）と“書（書道）”の教育研究に重きを置き、実績を積み、学風を培い、教育研究の世界に然と拠点築いて参りました。明年はその130周年になります。とりわけ日本漢文学研究の永年の実績により、現在（2004年から）日本政府により“日本漢文学研究の世界的拠点の構築”のプログラムにより21世紀COEプログラムに採択されています。このプログラムの推進にあたっては国境を越えて多くの海外研究者の協力を得て来ておりますが、とりわけ浙江商工大学のお二人の王先生、王勇教授・日本文化研究所長、王宝平教授が深く関与され、そのよしみにより2005年には、二松學舎大学と浙江商工大学との間に、現在は包括的な段階ではありますが、学術交流の協定を結んでおります。そうした両大学間の友好と交流の時間を踏まえ、両者協力して今回のシンポジウムが企画され、今日実施の日を迎えた次第であります。両大学のスタッフを初め、日中のみならず世界各地から同学の士を集め、シンポジウムを盛り立てていただいております。合わせて行われますCOEプログラムの拠点リーダー会議と合わせて、今日この日、この場を基点として、書籍の文化的使命、ひいては日本漢文学研究の新たな進展に繋がることを信じます。

私は、プログラム拠点校の学長として、その内容と成果を具に見届けるとともに、交流提携校である浙江工商大学を表敬訪問し、両大学間の友好と交流がより発展するように努めるべく参りました。

最後に、学長先生、研究所長先生をはじめ浙江工商大学の関係者各位に、このシンポジウムの実現と実際の運営のためにご尽力をいただいたことに深く感謝の意を表しまして、挨拶とさせていただきます。